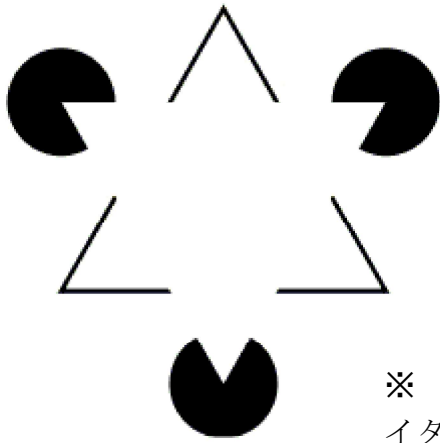


脳科学と仏教？

- ◆ 黒い線の三角形の上に白い三角形が重なっているように見えますか？
- ◆ 白い三角形は、背景に較べて、明るく浮き上がって見えますか？



※ カニツアの三角形  
イタリアの心理学者ガエタノ・カニツア  
(1913年-1993年)が1955年に発表した。

科学は幾千年にわたり、主に物質の世界を研究対象として真理を探索してきた。その恩恵を受け人類は進歩してきた。ところが、一九八〇年代から、人間の心(精神世界)を探索する【脳科学】分野の研究が、実験方法や装置の飛躍的進歩により、脳や神経細胞の個々のはたらきを解明して、人間の悲しみ・癒し・怒りなどの精神作用まで、生物学的科学的論理として語る事ができる時代になってきた。近い将来、人間が、宗教を信じて救われると考えられるのは、脳の特定の細胞が、そうした働きをする等と、物理的原理として説明解明される日が、やって来るかも知れない。

■ 脳科学から見た日本人の行動パターン

こうした研究の先駆的先鞭をつけたのが、上図の有名なカニツアの三角形と言われる図形である。

上図の白い三角形には、輪郭が見えているのだが、実際には、この三角形は物理的に存在していない(白い三角形には線が描かれていない)。こうした効果を、『主観的輪郭』と呼ばれている。又周辺よりも明るく見えるが、実際には周辺の輝度(色)は等しい。バックマン刺激とも言われている。

人間は、五官を通じて感じた信号(電気信号)を、脳の中で作り直して、この場合には見ている。必ずしもあるがままの姿・実態を見ている訳ではないのである。

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災は、死者・行方不明者二万五千人以上の大惨禍をもたらした。諸外国では、先進国・途上国を問わず、こうした大惨禍の後には暴動や略奪が発生し、無秩序化するのが通例である。ところが、日本では、そうした暴動等が起きなかつた事に対して、多くの海外メディアが、驚愕と驚嘆をもって報道をしていた。余り日頃好意的で

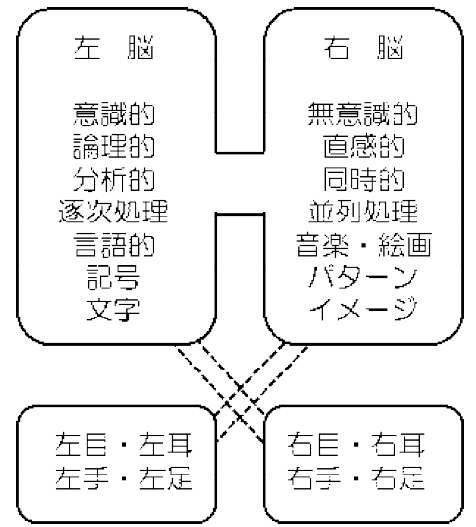
平和公園墓参のご案内

日時：8月12日(土)  
13日(日)

午前8時頃～午後1時頃



※ 地震よけの『鯰絵』



ない中国のメディアすら、日本人の行動を褒め讃えていた。日本には、他人からどう見られているかを無意識のうちに意識し、他人の事を先んじて配慮する精神文化が受け継がれてきた。

脳科学者の中野信子氏が、こうした日本人の行動に対して、『幸せホルモン』セロトニンが、関与しており。中野氏は、脳内には「セロトニン」という神経伝達物質があつて、これが多くあると、安心感を覚え、やる気も出る。このセロトニンの量を調節しているのが、セロトニントランスポーターというたんぱく質で、神経線維の末端から出たセロトニンを再び細胞内に取り込む役割

(再循環)を担っている。この数が多いと、セロトニンを多く使い回せるので、気持ち安定し、安心感を持つ。逆に少ないと不安傾向が高まる。日本人は、このセロトニントランスポーターの数が、少ない人の割合が世界で一番多い。つまり世界一、不安になりやすい民族なのであると指摘されている。

■日本人は虫の声を言葉として聴いている？

人間の脳は、左右の二つの脳に別れており、それぞれ機能が異なっている。右脳は音楽脳とも呼ばれ、非言語音を感覚的にとらえる事に優れており、音楽や機械音、雑音等を処理する。左脳は言語脳と呼ばれ、人間の話す声の理解や、計算など知的作業、論理的な処理を受け持つている。又右耳は左脳、左耳は右脳という結びつきが主となっている。これらの脳の機能は、全人類共通である。

ところが、日本人の脳の特異性について、生理学的に研究された日本医科歯科大学の角田忠信氏は、日本人の脳の機能について「虫や動物の

鳴き声などは、言語脳の左脳で言葉として聴き、西洋人は楽器や雑音と同じく、日本人とは反対の右脳で聴いている」西欧人は、虫の声は、単なる工場の騒音と同類のノイズ(雑音)として認識していると指摘された。

更に西洋の演劇に比べてみると、日本の演劇は、虫の声や小鳥の囀りなどの効果音が多用される。日本人の演出家の西洋演劇は、効果音が多く使われる傾向があると言われている。それは、効果音に、日本人はさまざまな意味を理解できる資質や、演出意図を読みほどこく感性と想像力に、長けている民族なのであるとされる。

松尾芭蕉の

閑さや岩にしみ入る蟬の声

文部省唱歌の

あれ松虫が鳴いている チンチロ

チンチロ チンチロリン あれ

鈴虫も鳴き出した リン リン

リン リン リン

又狂言「月見座頭」の秋の虫の声、そうした情景を抵抗なく、思い浮かべる事ができる。虫の音を聴き入る文化が、古来より日本人には

受け継がれてきたとする説は、納得できる気がする。

二千五百年前お釈迦さまの仏教が、色々な変遷を経て、四世紀ごろにインドで大乗仏教と言われる仏教運動が起こった。それは「ブツダは、無限の過去から無限の未来にわたり存続する永遠の存在である」という、新しい仏教思想を生み出し、同時に、すべての生きとし生けるものは、仏性を、生まれながら自らの中に持っている。仏教用語で「一切衆生悉有仏性」という仏教思想を説いたのである。

こうした思想が中国に伝播すると、この「生きとし生けるもの」の中に、草や木まで含まれる事になり更に日本では、「天台本覚思想」において、山や川でさえ、成仏できる「草木国土悉皆成仏」の思想が普及した。

多くの先人達は、日本人の山・岩・川などの森羅万象全てのものに魂が宿っているとすると、日本人固有のアミニズムの世界と習合したと説明されている。

だが同時に、こうした日本人のアニミズムの世界を支えてきたものが、先述の虫の音だけでなく、そのほかの動物の鳴き声、波、風、雨の音、小川のせせらぎまで、日本人は言語脳で聴いているとする角田理論からすれば、生理学的にも裏付けされた新たな日本人論ではないかと思う。

もちろん、こうした角田理論の『左・右脳』に対して、全く反論がないわけではないのだが、残念ながら小生には、その正否を論じる知識を持ち合わせていない。

### ■ 祈りにより病気が治った？

それは単なる迷信なのか？

音声が人間の身心に与える影響を認知心理学から研究されている山崎広子氏によれば、「念仏や真言など同じ言葉を、唱え続ける、その声は、耳から脳へ連続して運ばれ続けられる。その言葉の意味をある程度理解して唱えている訳なので、その意味もずっと脳へ刷り込み続ける事になり、脳は、声を良くする等と言う恣意的意志を無視して、声を恒常性に従って補正する働きを始める。ずっと唱

えているという事は、声↓耳↓脳↓声という円環性が、他の生命活動に邪魔される事もなく、脳は無駄なく音の処理を進め、本人が意識する事なくもつとも恒常性に沿った声を出すように身心に働きかけ、やがて恒常的な声が出てくると、脳は神経伝達物質を出す指令を与え、身心を治していく方向に働く。また恒常性に沿った声に乗せた願いは、強烈な自己イメージを定着させ、その願いをかなえる自分自身へと自分を変えていく事ができる」

即ち、古い説話集を引用するまでもなく、祈り続けたら病気が治ったとか、願いがかなった。修業僧などが、瞑想状態に入り、映像が見えたりするトランス状態になったりする話をよく聞く。こうした現象も、単なる荒唐無稽な話ではなくて、ある程度科学的・合理的説明が出来ると言われるのである。

鹿島神宮の宝物館に、江戸時代の「鯰絵」の資料が保存されている。江戸時代の人々は、大鯰が暴れて地震を起こすと信じて疑わなかった。

今日では、我々は、地球規模のマグマやプレート移動によつて地震が引き起こされるとする科学的原理を

ある程度は認知している。鯰が暴れて地震が起こす等とは信じていない、迷信と嘲笑しているのだが、科学的原理を熟知したとて、正確な地震の規模や場所を予見できる技術を、人類はまだ持ち合わせていない。地震に対する不安や恐怖心が軽減された訳でもない。『鯰絵』を拝み信じていた江戸時代の人々の方が、脳科学的な意味では、日常生活を安心して暮らしていたのかも知れない。

しばしば、親鸞聖人は、呪術を完全否定した。近代的合理的価値観の理想を親鸞聖人に求め、そうした事柄を聖人の著作の中に恣意的に見つけ・集める作業がなされ、非合理的なもの、切り捨てられてきたのが、宗門の現代教学であつた気がする。

しかし、親鸞聖人の一番身近にいた、良き理解者の妻の恵信尼は、生前に追善供養の五輪塔の建立を志したり、末娘の覚信尼から贈られた着物を、自らの死装束にする喜びを手紙に書いて送っている。戦乱と飢饉の中世の時代の一般的な人々にとつ

ての最大関心事としての現世利益・先祖供養を排除しての信仰は、およそ考えられないのである。

民衆には、民衆の為に必要な宗教がある。宗祖の教義を探求し、経文の解釈を攻究して篤く語る僧侶の法話が、何か上滑りして、多くの民衆には届いていない現実を直視しなければならぬのではなからうか。

五千万人の人口の八割以上が仏教徒のミャンマー（ビルマ）を訪れた折、多くの人々が、仏塔や仏蹟に祈り礼拝する姿を目の当たりにして、そこには論理・理屈を越えた、民衆の為の宗教が生きている実感を感じ感動を覚えたのである。

### 参考文献

※山崎弘子 「8割の人は自分声が嫌い」

※角田忠信 「日本人の脳の研究」

※中野信子 『脳科学からみた「祈り」』

※小山聡子 「浄土真宗とは何か」

※勝桂子 「聖の社会学」

※佐々木閑 「集中講義 大乘仏教」

※新編日本古典文学全集「狂言集」

# 狂言「魚説経（うおぜつきょう）」

撰津国兵庫の浦の漁（漁師）が、殺生が嫌になつたので、にわか出家（偽坊主）となり旅に出る。その旅路の途中、持仏堂を建立した信心の深い都の人に出会い、自らの持仏堂へ、出家を連れて帰り、説経を頼みます。漁師だったので、経典を知らない出家（漁師）が、苦しまぎれに語る説経とは…。魚の名づくしでもっともらしく語る説経？…

その説経の一部を紹介してみます。

いいでいで鱈ば、説法を述べんとて  
 烏賊にも 鱈にすすけたる 黒鯛  
 の衣を着し 干鮭色の衣を掛け  
 殊勝の珠数を蛤 大鯛の高麗鮫の上  
 へ熨斗々と 鮎上り 金海鼠を鳴  
 らさせ鰐口泥鰌々と 打ち鳴らし  
 まず説法を 鯛なり 聴衆も鯨  
 集まり、心の海月 赤い鯨の如  
 きも、鰻の穴より出るが如く、ぬ  
 らりぬらりと頭を下げ、聴聞すべ  
 し。筒切り敬つて藻魚 茅抽鯛  
 教主鮭如来、鯛子の菩薩に申して申  
 鯖、鰈経を読もうとも、鮎には習  
 うべからず。鯉願う処は鮎落を得  
 鯛々と生ぜられたきなり 仏も鮎鯉  
 の御海苔を成し給うも、子魚の為な  
 らば、海鼠 かますご 雑魚 き  
 すご諸子 鯛子 金海鼠 はららご  
 海参 かく大勢の数の子も、親に  
 対して鮓ならば、これ大いなる鱈  
 なり。

いいでいでさらば、説法を述べん  
 とて如何にも 煤にすすけたる  
 黒色の衣を着し 干鮭色の衣を掛  
 け 水晶の珠数をつまぐり 大鯛  
 の高麗縁の上へ、のしのと 這  
 い上がり 金鼓を鳴らせ鰐口ど  
 んじやんとんじやんと 打ち鳴ら  
 し まず説法を するなり聴衆も  
 早く集まり、心の暗を 明くして  
 鯨の如きも、鰻の穴より出るが如  
 く、ぬらりぬらりと頭を下げ、聴聞  
 すべし。謹んで敬つて申す。値遇大  
 教主釋迦如来、鯛子の菩薩に申し  
 て申さば仮令経を読もうとも、な  
 まじには習うべからず。乞い願う  
 処は補陀落を得 此方此方と生ぜ  
 られたきなり 仏も安居の御法を  
 成し給うも、子魚（教養）の為なら  
 ば、海鼠 かますご 雑魚 きす  
 ご諸子 鯛子 金海鼠 はららご  
 海参 かく大勢の数の子も、親  
 に対して二心ならば、これ大いな  
 る不幸なり。

## ■ 語句解説

- ※干鮭色・色あせた衣「乾鮭」は鮭の腑を取り日干したものを。
- ※殊勝（水晶）・魚のさよりを水晶魚と言う
- ※高麗縁：社寺で用いられる畳のへりの事
- ※金海鼠・なまこの一種
- ※筒切り敬つて藻魚：謹みうやまつて申す（法会で読み上げられる表白文）
- ※鰈・仮に
- ※鮎には・いいかげんに
- ※補陀落・観音菩薩の住む浄土
- ※鮎鯉の御海苔・安居は夏期の僧侶の特別講義（修行）の事。

この狂言の「魚説経」は、なかなか秀作と思う。漁師が出家するストーリーは、蓮如上人の「お文」一帖目三通「獵漁」を彷彿させる。中世の村落では、村はずれにお堂（庵）があり自由に旅人が泊まる事が出来た。この狂言では、篤信者が個人で持仏堂を建立した事になっていのだが、古代に、諸国を遊行・遍歴していた旅の僧侶（遊行聖）等が、中世以降、村落に定住し

## 修 勤 講 恩 報

平成29年11月9日（木）  
 午前10：00～  
 勤行・お説教・おとき

て、村落寺院になつた歴史を暗に語っているような気がする。

この狂言は、魚の名前を羅列しているのだが、不明の魚名も有り。又初めて見る漢字の魚名も有ったり、かなり仏教の知識・造詣が深い人によつて作られたと思われる。

又鑑賞する側に於いても、予備知識として仏教用語の意味を知っていると、楽しく鑑賞できる狂言の名作である。いつの日か自坊で演じてみたいのである。

### 編集後記

今年の寺報遅くなりました。少々難解な文章・脳科学？狂言？「住職」